童話

何故さう物語(三)

——チャールズ・ラム——

中野好夫譯

何故人が燒豚を食べるやうになつたかといふ話

燒豚—皆さん、燒豚を知つてますネ、今では、お魚だとか、お肉だとか、御馳走を煮たり、燒いたり、美味しくお料理をして、それからいたゞきますネ。ところが昔、昔、大昔はまだ煮たり、燒いたり、お料理をすることをまだ人間が知らなかつたのです。よろしいか、このお話はその時分のお話なのです。で、あるところにホテイといふ豚飼ひが住んで居りました。そしてホテイにはボーボーといふ男の子が一人ありました。それから豚飼ひなのですから、豚が居ましたネ。それも丁度、可愛い豚の赤ん坊が生れたばかりの時で、櫻色にクリクリ肥えた仔豚が、一つ、二つ、三つ、四つそうです、九つ居りました。で、ある朝のこと、ホテイはいつものやうに豚にやる栃(どち)の實を拾ひに森へ參りました。そこでお家の留守番をしてゐたのは——ボーボーでしたネ。このボーボーといふ子供がまた大變な惡戯小僧で、それにもつといけないことは、火遊びが大好きだつたのです、いけませんネ。そこで今日も、お父さんのホテイがゐなくなつたものですから、またしても、こつそり大好きな火遊びをはじめました。ところがどうでせう、どうした機(はづ)みだか、傍にあつた蒿束に、パッと火の粉が飛びましたネ。すると見る見るうちに、ボーボーボーボーと燃え上つて、お家も何もみーんな、すつかり燒けて、火になつてしまひました。サア、大變でせう。ところがお家よりも、何より

も、もつと大變なことは、あの可愛い櫻色にクリクリ肥えた九匹の仔豚が一つ殘らず、みーんなお家と一緒に燒け死んでしまつたのです。ボーボーも急に恐はくなりました。お父さんが歸つたら、何と言はうかしら、お父さんはひどく叱るだらうなあ、——可哀さうに焦茶色に燒死んだ仔豚の前に座つてボーボーはボロボロ涙をこぼして、泣き出してしまひました。その時でしたネ、ボーボーの鼻の先に、プーンと、それは奇妙な、なんとも言へない香がして來ました。オヤ、何の香かしら。するとボーボーの鼻の先は自然にピクリ、ピクリと、動きました。お家の燒けた匂ひかしら——そうでもない……草や花の焦げた匂ひかしら、——イヤ、それとも違ふ……變だ、變だと不思議さうに考へてゐるうちに、どうでせう、ボーボーの口元に、いつの間にか、涎れがタラタラタラ、と流れてゐるぢやありませんか。サア、何だか解らないその時、ふとボーボーは思ひました。もしかひよつとして、未だ仔豚は生きてゐんぢやないかしら、そうだ、と氣がつくと、ボーボーはソーッと手を伸して、ためしに前にあつた仔豚のお腹に、ヒョイと觸つてみました。がその途端に、ボーボーは、アッツッツ、と言つたと思ふと、大急ぎで火傷をした指先を、いきなり口の中へ持つてゆきました。その時ボーボーは、舌の先に、何か今迄食べたこともない、なんとも言へない美味しい味が、ボーッと殘つてゐるのに氣がつきました。オヤ、變だぞ!!、そう思つて、ボーボーは今度は充分用心をした上で、ソーッとも一度仔豚の體を撫でてみました。そして今度は火傷もしないのに、わざつと指の先を口の中に突込みました。ハハーン、解つた!!。幾分のろまのボーボーにも、やがてボンヤリ譯が解つてまゐりました。あの香は、そうだ、この仔豚なんだ。それからあの美味しい味も、やつぱりこの仔豚に違ひない、そうだ、そうだ、燒けた皮の片端が、肉と一緒に、指の先に附着いて來たんだ。サア、それからといふものは、ピッタリ燒け跡に座りこんでしまつて、食べましたとも、食べましたとも、ガツガツ食べましたネ、兩手に一杯、黑焦けになつた皮も肉も、一緒くたに、ボーボーは目を白黑させながら、頰張りました。暫らくして、いつの間にかお父さんのホテイが森から歸つて、この恐ろ

しい樣子を見ると、いきなり棒をとつて、ポンポンポンとボーボーの背中を撲りつけましたが、肝心のボーボーは、そんなことは、蠅の上つたほどにも氣がつくものですか。たゞもう夢中で、お腹の方の御馳走に何んにもわからなくなつて居ます。やつともう殆んど御馳走がなくなつてしまつたころでした、ボーボーはやつとお父さんに撲たれてゐるのに、氣がつきました。

『この罰當り奴、何をガツガツ食つてゐんだ。また惡戲をしやがつて。家も何も燒いちまつて、まだ足りないのか、畜生!!火まで食つてやがる。エー、それや何んだ!!』

『父ちやん、豚だよ、豚だよ、ネー、食べて御覽よ、美味しいんだから』。

ホテイの耳はガンガン鳴り出しました。そしてもうたゞ無茶苦茶に怒鳴つて居りました。ボーボーはボーボーで、さつきからやつと一匹御馳走になつてしまふと、急に鼻の先をピクピク動かしながら、又しても灰の中から一匹、燒け死んだ仔豚を探し出して參りました。そして今度は、力一杯それを二つに引き裂くと。

『食べなよ、食べなよ、父ちやん、いゝから食べなよ』。

と金切聲を出して、片方の半分を、ホテイの手の中へ無理矢理に押しこんでしまひました。

『いつそのこと、撲ち殺してやらうかしら、この罰當り奴!!』

ホテイは燒けた仔豚を片手に持つたまゝ、ブルブルに身體中慄えて居りました。ところが、暫らくすると、ソラ丁度ボーボーの場合と同じやうに、ホテイは手の中が、俄にひどく暑くなつて參りました、そして、これもボーボーと場合と同じやうに、思はず手を口の中へ持つてゆきました。そして——ホテイは、いくら一生懸命になつて苦い顏をしてみせようと思つても、それは駄目でした。

さて、それから暫らくすると、ホテイ親子は、さつきまでの樣子とは打つて變つて、さも仲好さゝうに竝んで座つて、殘りの御馳走を、すつかり皮一つ殘らなくなるまで、食べて居りました。

ボーボーは父親から、決してこのことを口外しないやうにと、堅く命令けられました。だつて、若しか近所の人達

が、こんな出來事を知らうものならば、折角神樣が下すつた御馳走を、人間が勝手に燒いて食べたり、不屆も何も、怪しからんといふことで、ひどい目に逢ふに、きまつてゐるからでした。けれどもやつぱり、間もなく妙な噂が近所中に擴まつて參りました。その噂といふのは、ホテイの家が此頃になつて、ひどく度々、火事を出して燒けてしまふといふのです。しかも、もつと變なことは、ホテイの家に、櫻色にクリクリ肥えた可愛い仔豚が生れると、きつときまつて火事があるといふのです。それに今迄と違つて、火事がある度に、お父さんのホテイは、ボーボーを吐るごころか、目について段々ひどく可愛がるやうになつて參ります。サア、變だ、サア、不審しい……といふ噂が、段々、段々、高くなつて、到頭村の人達が集まつて、相談といふことになりました。で結局ソーツと、ホテイ父子に知れないやうに、二人の家を見張りすることにきまりました。果して暫らくして、仔豚が生れると、いつものやうにチャンと火事を出たではありませんか。そんな譯で、ホテイ親子の恐ろしい祕密は、見張りの村人にすつかり見られてしまひました。二人はすぐさま捕へられた上、嚴重な番人をつけて、町の裁判所へ送られることになりました。

さて、いよいよ裁判の日になりましたが、サアその日は大變なことになりました。なにしろ火を食べる珍しい人間だ、といふ噂なので、もう町中の人々が、學者も、商人も、新聞記者も、旅人も、猫も、杓子も、たゞもうゾロゾロ、ゾロゾロと、押しかけて參りました。やがて裁判もお終ひ方になつて、いよいよ裁判長が、一段高い臺の上に上つて、判決を下すことになりました。丁度その時でした。突然陪審官の一人が、立上つて申しました。

『恐れながら、裁判長閣下に申上げます。陪審官と致しまして、今一つお願ひが御座います。と申しますのは、判決が御座います前に、この親子の者が訴へられて居りまするその證據の品物、つまり燒けました豚とやらいふ物を一見致したいもので御座います』。

裁判長はこの意外な申出に、一寸考へて居ましたが、

『では早速持つて來るやうに申付ける』。

といふ言葉でした。

暫らくすると下役の役人達が、焦茶色に燒けた、クリクリ肥つた仔豚を臺の上に載せて、恭々しく、陪審官達の前へ運んで參りました。陪審達は、一寸不思議さうな顔をして、しばらく眺めて居りましたが、やがて一人が手を延してさも勿體らしい恰好で、仔豚の身體に觸りました。さぞうでせう、その途端に、陪審官の老人は、アッツ……と言つたかと思ふと、大急ぎで手を口に持つて參りました。それから順番に、一人一人、仔豚に觸つてみては、アッ……、そしてはきまつて手を口に突込みます。だが、もつと、もつと不思議なことは、その後で陪審官達は、一寸お互ひに顔を見合せたかと思ふと、やがてのこと、之は又集まつて相談一つするでもない、人々が呆氣にとられてゐる間に、なんと親子は無罪だ、といふ申立てをしてしまひました。

裁判長は、大變賢い人でありましたから、無論すぐ、これは少し變だな、と氣がつきました。でも裁判長はもつと、もつと、賢い人だつたので、その場はそのまゝ知らない顔をして、到頭ホテイ親子は、無罪といふ判決をしてしまひました。その代りに、裁判が終つて、家へ歸ると、裁判長はこつそり人をやつて、町中の仔豚といふ仔豚を、一匹殘らず、買ひ集めさせました。

それから二三日經ちました。まだ日の明るい中でした。裁判長の立派な大きなお家がドンドン、ドンドン、恐ろしい勢で燃えてゐるのが見えました。サア、それからといふものは、奇妙なことに、あちらを向ひても火事だ、こちらを向ひても火事だ、もう町中は毎日火事ばかりになつてしまひました。國中、何處へ行つても、仔豚と材木の値段は日一日と高くなるばかり、國中の保險會社といふ保險會社は、一軒殘らず、店を閉めてしまひました。

そんな風で、人々は段々ともう粗末な家ばかり建てるやうになつて、今迄のやうに、競爭で立派な家を建てるといふやうなことは、見ようにも見られなくなつてしまひました。そして今にこれでは、大工も、左官も、みなくなつてしまふだらうとさへ思はれました。

皆さん、もしこのまゝで續いて居たら、どうでせう。でも、いゝことには、――ほんとに、いゝことには、それか

七一頁上段へ

生田教育部長の靈に約三十秒の默禱を捧げた。

次に仙臺保育會より一同會員を代表して叮嚀なる主催者側への謝辭あり。尙議長より次回主催地は、昭和十二年度仙臺市に於て同十五年度は東京市に於て開かるゝ由報告あり。午後〇時二十分盛會裡に解散した。

閉會後一同大每、大朝兩新聞社、動物園、大阪城、中央市場等の自由見學があつた。

追而本大會詳細なる記錄は、大阪市保育會よりパンフレットとして刊行の筈。

（以上）

六七頁より

ら間もなく、それはそれは豪い賢い人が生れて、私達に大變有難い發明をして下さつたのです。それは豚だとか、お魚だとか、お肉を燒くのに、なにも態々お家迄燒かなくとも、金串しだとか、肉焙りとか、大變便利な道具がこさへられるといふ、この大發明をして下さいました。お蔭でそれからといふものは、私達は一度一度お家を燒がなくとも、あの美味しいお魚だとか、お肉だとかを煮たり、燒いたり、美味しくお料理をしていたゞけるやうになりましたトサ。

さわやかな五月の風に、セルの肌ざわりも新鮮なこのごろ皆樣身も心もかろ〳〵と子供達との每日をお過しの事と思ひます。

四月に迎へたこども達も一日每に　こちらのものになりませう、また、小さい乍らに先輩らしくふるまふこども達は、ます〳〵つゝ込んでみて行けさうになりませう。本とうに力一ぱいにやらずにゐられない五月です。

＊　＊　＊

さきに好評いたゞきました童話に次いで童謠を募集中でございます。お互に一つ勉强してゞひ、少くとも一篇は應募いたさうではございませんか。

（編輯部）